

---

 新刊紹介
 

---

福代康夫・高野秀昭・千原光雄・松岡敦充編

日本の赤潮生物—写真と解説

内田老鶴圃. 407頁 (1990). 13,390円

いきなり私事にわたって恐縮であるが、筆者が1978年に国立公害研究所(現国立環境研究所)に赴任して、赤潮発生機構の研究にたずさわることになった時には、赤潮原因種の分類はきわめて混乱した状態であった。例えば、瀬戸内海播磨灘で大規模な赤潮を形成する *Chattonella antiqua*, *C. marina* 等は *Hornellia* sp. とされ、霞ヶ浦等で水の華を形成する *Microcystis aeruginosa*, *M. viridis*, *M. wesenbergii* はすべて *M. aeruginosa* あるいは *M. sp.* として報告されていたものである。このような状態では、赤潮研究の円滑な推進は困難ではないかと思っていたところ、1979年度になって農林水産省と環境庁が事務局となり、大学及び研究機関の学識経験者からなる「赤潮研究会」が分類・機構・予察・防除の4班構成で発足した。分類班をのぞく他の3班は1982年度で解散したが、分類班のみは存続し「赤潮問題研究会・分類部会」として1984年度まで活発な活動を行った。この間、「赤潮マニュアル」(全5巻)及び「赤潮生物シート」(全6巻)を刊行して、国内外の大学・研究機関の赤潮研究に大いに活用され、赤潮研究の発展に対する貢献は著しいものであった。その後「赤潮マニュアル」は「赤潮生物研究指針」(日本水産資源保護協会編、秀和刊)として増補改訂され多くの関連する研究者に大いに活用されている。今回もう一方の「赤潮生物シート」を増補・改訂し、「日本の赤潮生物—写真と解説」として刊行したことは、赤潮研究及び藻類研究にたずさわる多くの研究者にとって、これほど慶ばしいことはない。ここに関係者各位にたいして満腔の敬意を表明したい。

本書は、「赤潮生物シート」では同一網の種でも各巻に分載されていたものを一連にまとめ、種の解説についても改訂をくわえている。200種類の赤潮生物について掲載し、各網内訳としては、藍藻8種、クリプト藻2種、渦鞭毛藻70種、珪藻85種、ラフィド藻

9種、黄金藻6種、ハプト藻4種、ユーグレナ藻8種、プランクトン藻5種、緑藻1種及び原生動物2種である。各種とも光学顕微鏡、走査型電子顕微鏡あるいは透過型電子顕微鏡の写真が適切にレイアウトされ、その生物全体の大きさや外部形態の特徴が詳細に記述されているだけでなく、内部形態やシスト形成の有無、生活史、生理・生態及び赤潮形成の有無等についても記述されている。解説文を読んで感激することは、分類や形態については、出来る限り最新の知見をいれたいという編者及び執筆者の意気込みが随所に見られることである。例えば、瀬戸内海播磨灘で大規模な赤潮を形成する *Chattonella* 属については、従来の *C. antiqua*, *C. marina* にくわえ4種類の新種を、論文として準備中にもかかわらず、掲載していることは、*Chattonella* の研究を行っている研究者にとってはこのうえない情報である。ただし、海産赤潮の主要な種はもれることなく掲載されているのに対し、藍藻 *Microcystis wesenbergii*, *Anabaena affinis*, *Aphanizomenon flos-aquae*, *Gloetrichia echinulata*, 緑藻 *Closterium aciculare* var. *subprorum*, *Staurastrum dorsidentiferum* var. *ornatum*, 渦鞭毛藻 *Ceratium hirundinella* 等湖沼で赤潮を形成する代表的な種がもれていることから、淡水赤潮についてはまだ不十分という感じが残る。

本書の表紙及び解説はすべて和文、英文の併用となっており、国外の研究者も十分活用できるようになっている。日本に出現したものに限ってはいても、赤潮生物についてこのような形で集大成した例は国外でも皆無であり、国際的に高い評価をうけることは間違いないと思われる。ただし、唯一残念に思うことは、写真の説明に英文がないことである。本書では、写真が極めて重要なものであるにもかかわらず、何故英文の説明をいれなかったのか理解に苦しむ。これにより、表紙、解説文を和文、英文併用とした意味が殆どなくなっているといっても過言でないほど、全く残念なことであり、いまからでも何らかの手段で英文の説明をいれられないだろうかと思う。

(国立環境研究所生物圏環境部 渡辺 信)